

【講評文】8月10日（水） 7校目

「78億人の1人」 関高校

この劇では、登場人物たちが自分の気持ちをきちんと言葉にしていなかったことでずれ違い、あるいは自分の趣味嗜好をさらけ出すことでむしろ周囲から受け入れられていく様子が描かれていました。「気持ちは言葉にしなければ伝わらない」とはよく言われることなのですが、その難しさと同時に伝えられたときの安心感がよく伝わる劇でした。また、作中で思い悩む登場人物に、兄助が手を差し伸べることで勇気を与えている様子など、お互いを思いやることで初めて生まれる一歩というものがある事も伝わってきました。

舞台装置は、シンプルながら使いどころをシーンによって分けることで、その時登場人物たちがどこにいるのかが分かり、工夫を感じました。さらに、奥に置かれていた台ははじめにしか使われないのかと思いきや、最後のシーンで母親の胎内が表現されていることに驚き、その種明かしを見て観劇後にすっきりする感覚さえありました。装置の限定的な使用によって印象付ける効果的な演出だと感じます。

兄有の話し方は、登場時にはとても抑揚がなく無感情に感じられました。しかしそれも後に「ロボット」と言われていた過去の話とリンクしており、話が進んでから知る様々な事情と人物の葛藤を、時系列のままではなく前後して表現されており、観客に謎や答えを与える台本構成の工夫も感じられました。

全体的に、登場人物たちによる喜怒哀楽の表現が控えめで、やや平坦な印象を受けてしまったという意見もありました。もう少し身体表現を駆使して感情を表現された方が、観客も視覚的に楽しむことができたのではないのでしょうか。その中であって兄助役は、子どもらしい無邪気な動きが大きくなされており、特にゴジラのシーンではそれがよく表現されていました。

照明では、何よりラストのピンスポットが印象的でした。客席後方よりまっすぐに伸びた光の筋が、胎内の羊水から今まさに生を受けようとする様子をあらわしているようでした。それがまた、冒頭のシーンで詠まれた詩のイメージと重ねられ、より一層神秘的なものとして描かれていたように思います。

キャストの皆さんと舞台美術が一体となって、うまく伝わらない葛藤と、それでも思いを伝えることの大切さがよく表現された素晴らしい作品になっていました。

関高校のみなさん、上演お疲れさまでした。

(文責 岐阜第一高校 みんな)